

平成29年8月 調査研究報告

三沢市

視察目的

「一次産品を活用した特産品の開発について」

視察日時 29年8月2日(水)

視察概要および所見

三沢市の概要

三沢市は青森県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は六ヶ所村、南はおいらせ町、西は東北町などに隣接しており、米軍と自衛隊の基地を抱えた農業および商業都市である。人口は39,847人(平成29年3月末)、面積は119.87平方キロメートルである。

気候的は、北国でありながら積雪が少ないことと、北西から吹く季節風のため、晴天の多いことが特徴である。また、梅雨の不快さはあまり感じられないものの、梅雨明けは遅く、夏が短いのも特徴である。

このようなことから、農産物は「ゴボウ」や「長芋」「にんにく」などの根菜類が多く、特に「ゴボウ」は日本一の産地との自負がある。また、「スルメイカ」や「ほっき貝」「ヒラメ」などの海産物のほか、「パイカ」と呼ばれる豚バラ肉周辺の軟骨部位も特産である。

特産品開発への補助制度等の概要

三沢市の特産品開発は、「ゴボウ」「長芋」などの農産物や「スルメ」などの海産物をそのまま市場に出荷するだけでなく、原材料に何らかの加工を行い、付加価値を高めて出荷することを目的としている。これは、市内に農産物や海産物の加工施設がないことにより、加工工場のある他の自治体に原料だけの出荷をせざるを得ず、三沢市の農家や漁業者の収入増につながっていない、という現状を変えようという試みである。

具体的な取り組みは、特産品づくりへの補助金制度、食品加工などを行うための起業支援制度、食品加工の試作機器が設置してある公共施設整備の3つが主なものであった。特産品づくりへの補助制度は、補助率が対象経費の2/3以内で上限額は100万円となっている。特産品の新規開発だけでなく、補助金を使って開発した特産品を、さらに後年度に改良する際にも活用できる。起業への補助金は県の地方創生関連のものとなっており、2年間の短期的な制度であるが、対象経費の8割以内で500万円を上限としている。食品の加工試作ができる施設は、フリーズドライ、真空冷却器、スチームコンベクションオーブンなど、地元農産品の加工試作のニーズに合わせた機器が設置されており、試作品作りを進める事業者は自由に使える。利用者からは好評とのことである。

所見

京丹後市の新商品開発への補助金制度は、新規に開発する場合のみを支給対象とし、対象経費の1/3以内で30万円が限度となっている。(機械設備の場合は限度額が50万円)。京丹後市と三沢市の制度の違いは、対象経費の1/3以内か2/3以内か、という点と、限度額が30万円か100万円という、支援の手厚さが先ず大きく違う。さらに特筆すべき違いは、新製品の開発だけでなく、補助金を受けて開発した製品を改良する際にも使える、という点である。三沢市は、一度きりの開発費の支援ではなく、改良を重ねる費用についても支援をする、という考え方で事業を進めており、その結果、特産のゴボウを活用した「ゴボウ茶」は市を代表する特産品に育ち、地元以外に首都圏などでも売り上げが伸びているほか、スルメイカや「パイカ」と呼ばれる豚バラ肉の関連商品も次々に生まれている。

実際に特産品を開発し、商品が市場に流通できるようになるまでには、先ず市場の調査を行い、開発した新製品を実際に展示会などで試験的に販売し、消費者から「量の多少」「味」「使い勝手」「パッケージ」などに対する生の声を聞きながら、改良を重ねて商品を作り上げる、という流れを経るのが一般的である。自分自身、特産品開発をしてきた経験があるが、一度の試作開発ですぐに売れるものが作れるということはほとんどなく、消費者の声を聞きながら何度も何度も改良しなければ商品として市場に出せるものにはならない。このような経験から、試作品の開発だけでなく「改良に対する経費」も支援してもらえるということは、特産品開発に関心のある、特に中小零細事業者や農家、個人事業主にとっては大きな負担軽減になり、特産品開発への意欲を高める制度と言える。

京丹後市は、農水産物以外にも、絹織物などの特産物は多くあるが、生産者の所得向上が課題であり、そのためには、新たな加工品の開発や、新規の市場開拓も求められている。特に農家や個人事業主などが、積極的に特産品開発を活発に行えるような政策が必要である。そういう意味においても、三沢市のような補助金を使って開発した商品を、さらに改良するための費用についても支援する、という考え方は重要であり、京丹後市も取り入れるべき、と考える。



【三沢市役所での説明】

久慈市

視察目的

「中心市街地活性化の取り組みについて」

視察日時 平成29年8月3日（木）

視察概要および所見

久慈市の概要

久慈市は、岩手県北部の太平洋岸に面しており、東日本大震災では沿岸部を中心に大きな被害を受けた。人口は3万5642人、高齢人口比率は29.5%で面積は、623.5km²である。NHKの朝の連続ドラマ「あまちゃん」の舞台として近年有名になり、観光にも力を入れている。

久慈市の中心市街地の現状と、市街地活性化の取り組み

久慈市の中心市街地は、昭和62年に国道のバイパスが中心市街地を外れて東側に完成したことで衰弱化が始まった、とのことである。中心市街地にあった県立久慈病院が郊外に移転したほか、複数の老舗商業施設や大手スーパーも撤退した。その一方で、郊外型の大型店などが国道バイパス周辺に集積したことなどで、この20年間で中心市街地の売り場面積は約56%減り、年間販売額も約75%減少した。

東日本大震災では300億円を超える津波被害が発生し、平成28年8月30日の台風10号で2445棟が浸水被害を受け、195億円の被害が発生した。

市街地活性化の取り組み

平成10年に制定された「旧中心市街地活性化法」により、久慈市は平成12年3月に中心市街地活性化基本計画を策定した。当時の具体的な事業としては、電線類の地中化やご近所介護ステーションの開設、商店街の外観の統一化事業、シャッター絵画、北三陸くじ冬の市などを実施してきた。

その後、平成18年に制定された「中心市街地活性化法」により、平成19年5月に新たな基本計画を定め、平成25年3月までを第1期として新たな活性化策をスタートした。平成20年4月には、メイン事業として大手スーパー跡地に「やませ風土館」を整備した。この施設を整備するに際しては、地元の個人や商店主、地元中小企業からの出資で「(株)街の駅・久慈」を設立し、施設整備とその後の施設運営を行っている。株主は101名、出資は1億8410万円である。地域ぐるみの会社を設立したことにより内閣府からも高い評価を受けている。

ソフト事業としては、やる気のある経営者を個別に抽出し、業界紙などへの積極的な宣伝広報活動にも取り組んでいる。また、テナントミックス事業として、小売、飲食、サービス業の新規出店事業者対し100万円の出店工事費助成を行っている他、空き店舗対策チャレンジショップ事業として新規出店の未経験者等に対し家賃の一部助成も行っている。

第2期中心市街地活性化計画の取り組み

平成26年3月に第2期計画の認定を受け、平成26年4月から31年3月までの期間に新たな活性化事業を進めることとしている。

「山・里・海を丸ごと愉しめる結が支える賑わい・安心の街」が基本コンセプトであり、計画の中での特徴的な事業は、久慈駅前整備事業である。市街地の東に位置する、NHKの朝の連続ドラマ「あまちゃん」の舞台となった久慈駅の駅前エリアを整備し、市街地の西側に位置する「やませ風土館」と連携させることにより、市街地の人の流れを面的に拡大させることが狙いである。事業費は約23億円、財源は社会資本整備交付金（補助率50%）と合併特例債を活用とのことである。

所見

住民の生活様式や買い物の方法の変化、郊外型大店舗の進出など、中心市街地の空洞化が進み、市街地の活力や魅力の低下は全国的な課題である。市街地の再開発の必要性に迫られ、旧中心市街地活性化法を根拠にした活性化計画を定めた自治体は全国に約700ある、との説明があった。

京丹後市でも、いわゆる「中心市街地」としては網野町中心部や峰山町中心部、久美浜町中心部があげられると思うが、いずれの地域においても商店の閉鎖などが続き、魅力や活力が低下している。現在は、峰山町から大宮町にかけての国道312号線沿いや国道482号線に沿いに大型商業施設や郊外型店舗が集積している状況であるが、「中心市街地」と呼べるまではなっていない。

一方で、議会は昨年6月定例会で「京丹後市都市計画マスタープラン」を議決した。このマスタープランにのっとり、京丹後市全体を俯瞰した考え方で中心市街地整備について、構想を具体化する時期にきていると考える。特に旧網野町役場の庁舎跡地の利活用の方向性や、(仮称)大宮峰山ICの幹線道路に接続するエリアの「都市拠点地域」を中心とした都市開発と、マスタープランに記載された文化的複合施設の整備の早期の具体的検討が必要である。中心市街地を新たに整備する、ということで、特に次代を担う若い世代への魅力や夢を感じられるまちづくりを進めたい。

総合計画の策定の経過の中で、若い世代から「まちの魅力を感じられない」というような意見もあると聞いた。ソフト事業だけでなく、中長期的な投資としてハード事業も進める必要がある。新しい中心市街地整備を構想し、魅力あるまちづくりに踏み出す時期である。



【久慈市役所での説明】

八戸市

視察目的

「八戸ブックセンターについて」

視察日時 平成29年8月3日（木）

視察概要および所見

八戸市の概要

八戸市は青森県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北はおいらせ町及び五戸町、西は南部町、南は階上町及び岩手県軽米町に接し、夏はヤマセと呼ばれる東北の風の影響を受け冷涼で、冬は晴天が多く乾燥し、降雪量は少なく、日照時間が長い。臨海部には大規模な工業港、漁港、南部港が整備され、その背後には工業地帯が形成されている。

面積は305.5Km²、人口は、23万3070人である。八戸市では、中心市街地活性化基本方針を策定し、多様な都市機能が集積する活力あるまちづくりを進めている。

八戸ブックセンターの整備の背景と施設の概要

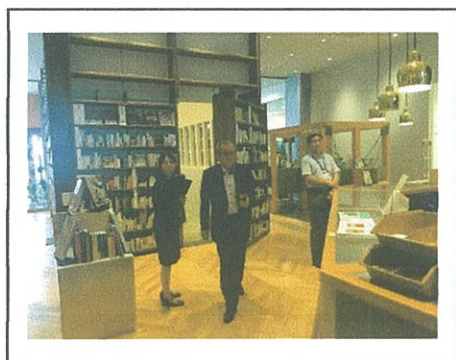
八戸ブックセンターは、市長の政策公約の掲げる「本のまち八戸」を推進する中心拠点として整備された。

本に関する「新たな公共サービス」を提供することで、市民が本に親しみ、市民の豊かな想像力や思考力を育み、本のある暮らしが当たり前となる「文化の薫り高いまち」を目指すとともに、中心市街地の活性化にもつなげることを目的としている

本に関する新たな公共サービスとは、民間の書店と公立の図書館との「隙間」を埋めるも

のとして、通常の民間書店では売り場に並ばないような専門書や貴重な本も置いて販売したり、飲み物を楽しみながら読書したり、本を書いたりするための「公共スペース」の提供などである。

施設の概要としては、市内中心部の民間商業ビルの1階に、書籍の販売スペース、読書スペース、会議室、カフェなどが一体として配置されている。



【八戸ブックセンター】



【ブックセンターのカフェ】

施設運営の基本方針等について

八戸に、「本好き」を増やし、八戸を「本のまち」にするための、「本の暮らしの拠点」というコンセプトに基づき、本を「読む人」を増やす、本を「書く人」を増やす、本で「まち」を盛り上げる、という3つの基本方針で運営している。

具体的には、これまで出会いの機会が少なかった本が身近にある環境を作り、本を手に取りたくなる工夫を凝らした陳列や空間設計、イベントの開催などを行なう。また、本を書く人を増やすために、執筆するためのスペースや相談窓口を解説するほか、本でまちを盛り上げるために「本のまち読書会」や「アカデミックトーク編集者は語る」と呼ばれるイベントの開催などである。

運営は市の直営だが、子どもから大人までが本と出会い、親しむ環境づくりに取り組み、民間書店や図書館と適切な機能分担を図りながら、先述のような「本に対する新たな公共サービス」の提供を行っている。

ブックセンターのギャラリーは、本の面白さを伝えるために展示のしかたにも工夫がされており、展示のノウハウは、東京都内にある大手民間書店の有名店に勤務経験のある職員が担っている。もちろんその場で気に入った本を買うことができる。

カフェはドリンクスタンド式で、カウンターで注文し、自分で本棚や読書席に持って行き、設置されたドリンクホルダーを使って本を読みながら飲み物が楽しめるようになっている。

所見

八戸市ブックセンターは、市民が本に親しみ、市民の豊かな想像力や思考力を育み、本のある暮らしが当たり前となる「文化の薫り高いまち」を目指す、という市長の公約で整備された施設である。基本的には本を販売する書店であるが、図書館のような読書スペースや勉強室もある新しいコンセプトの「公立書店」と言える。

本に関する新しい公共サービスを展開する、という点については、建物内にカフェがある公立図書館も近年増えつつあるので、これについて目新しさは感じられないが、民間書店ではあまり店舗に置かないような専門的な本や、貴重な本も置くほかに、「本を書きたい人」のためのスペースやワークショップを行ない、本を書きたい人を増やす、というコンセプトは特にユニークである。

本を書こうと思うと、相当に多くの本を読まないと書けないものである。本を書こうと思う人が増えることは、すなわち本好きの人が相当に増える、ということでもあろう。本を読むだけでなく、本を書きたいと思う市民を増やす、という市長の考えは秀逸であると感じた。担当者から「八戸の市長は『東京に行かなければ買えない本を八戸でも買えるような場を作りたい』『まちの発展のためには産業振興ばかりではだめだ、文化の振興も人口減少対策のために必要だ』と言っている」との説明もあった。自分自身まさにその通りだと思う。強く共感する。

一方で、施設は展示もユニークで、知的な刺激を感じる空間を演出し、確かにここにいるだけで本好きにはたまらない、ワクワクするような場所であったが、事業はスタートしたばかりでもあり、図書館とのすみ分けや、八戸ブックセンターに対して市民が求めるものの整理や費用対効果など、今後検証が必要になってくるのではないかと、とも思えた。

八戸ブックセンターの取り組みは始まったばかりであり、まだまだ手探りの部分も多いと思われるが、これからさまざまな実践を通して「本好きを増やす」という目的に向かって行われる取り組みや試みを注意深く見てゆきたい。

現在、京丹後市教育委員会は将来の市立図書館のあり方について図書館運営委員会に諮問している。ハード整備だけでなく、本好きを増やすための方策についても議論が進められるものと思っている。こちらの答申にも期待したい。



【八戸ブックセンターでの説明】

十和田市

視察目的

「市民図書館の建設経過と運営について」

視察日時 平成29年8月4日（金）

視察概要および所見

十和田市の概要

十和田市は青森県の南東の内陸部にあり、平成17年に旧十和田湖町と合併した人口約6万3千人の自治体である。市西部は十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田山系などがあり、十和田八万平国立公園に指定されている。また、市東部は奥入瀬川や稲生川などが潤す田園地帯や、基盤の目状に整備された中心市街地がある。この地域は、幕末の安政年間に原野の開拓が始まり、その後昭和の国営開墾事業として継承され、県内屈指の穀倉地帯として発展を遂げた。戦後は日本軍の関係施設の解体とともに、その跡地を基盤とした新たな都市計画が進められている。十和田湖や奥入瀬溪流などの観光資源もあり、観光にも力をいれている。

十和田市の市街地には「官庁街通り」と呼ばれる幅員36m、延長1,2キロの直線のメインストリートがあり、その道路沿線には市庁舎や病院などの公的施設が配置されている。官庁街通りには街路樹として松と桜の大木が植えられ、広い歩道と並木のコントラストが相まって非常に美しい景観を作っている。さらに2008年の現代美術館の開館や、屋外アート作品の沿線への配置など、市として官庁街通り全体を「アートのまち十和田」を目指すシンボリックなエリアとして整備している。

市民図書館建設の経緯

市民立図書館については、十和田市民図書館と、旧十和田湖町の町立図書館の2つの図書館を運営していたが、図書館の老朽化などにより、建て替え計画を進めることとした。

新しい図書館の建設地は官庁街通りとし、建物の設計・デザインは、官庁街通りの美的な統一感や景観にマッチする施設とするため、公募型プロポーザル方式で全国から公募することとなった。公募の結果、安藤忠雄氏の設計によるデザインが決定したものである。

建物は鉄筋コンクリート造1階建、建設費は14億5千万円である。建物は図書館の他に教育研修センターとしての多目的研修室や談話室なども併設され、「十和田市教育プラザ」の名称で複合施設として整備された図書館である。

建設費用の財源の一部には原子力の電源立地に関するものが活用されている。



【十和田市民図書館の外観】

市民図書館運営について

開館時間は午前9時から午後8時までで、休館日は、毎月第4木曜日。12月29日から1月4日は休館。蔵書点検期間は年間5日以内となっている。

職員体制は、正職員が7名。その他に、シルバー人材センターから6人来てもらっている。シルバー人材センターの6人の人員は、午後5時から夜8時までの間の勤務である。

図書館の休館が月1回だけであり、職員の休日はシフト制をとっている。なお、午後5時から8時までの業務はシルバー人材センターの方だけでやっており、シルバー人材センターへの支払いは年間194万円とのことである。

また、職員の他に図書館ボランティアが多数おられ、書架の整理や書籍のコーティングや修理など多くの作業を担ってもらっている、とのことである。

図書館利用に関するサービスや、図書館活動の展開については、団体貸し出しを活発に行い、学校以外に老人施設や社会福祉施設、公民館など、あらゆる場所で本を読む環境作りを進めている。また、身体障害者への宅配貸し出しや、近年全国でも広がりつつある「子どもビブリオバトル」も行っている。

所見

京丹後市の図書館は、2館4室を運営している。合併して14年目を迎え、京丹後市教育委員会は、図書館運営協議会に今後の図書館のありかたについて諮問しているところである。

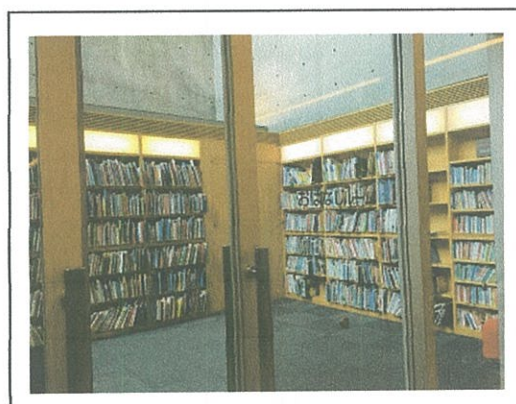
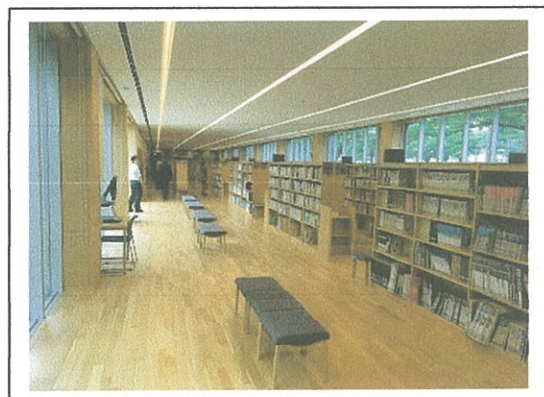
議会は昨年6月定例会で「京丹後市都市計画マスタープラン」を議決したが、このマスタープランには国道312号や482号の結節点付近に、都市施設として文化的複合施設を記載している。自分自身、十和田市民図書館を視察して、まちのランドマークとしての図書館が必要だ、という思いを一層強くした。

これから全国でさらに人口減少が進む中、自治体間や企業間で特に若者世代の奪い合いがこれからますます進むと見られている。移住やUターンの希望者も含め、若者たちがどのまちに住むかを決めるとき「まちの魅力」はまちを選ぶ際に大きく影響する。

「選ばれるまちを目指さなければならない」。これは自分自身が京丹後のまちづくりを考える上で最も大切にしている考え方である。

選ばれる魅力あるまちとは何か、どういうものがあればまちの魅力が高まるのか、価値が高まるのか、を考える際、その一つとして「人が集える場」としての機能を供えた図書館を含む複合的文化施設も京丹後市には必要ではないだろうか。スポーツ施設の整備は十分とは言えないまでもある程度は充実してきた。次は文化的施設の充実の番である。

もちろん、単なるハコモノとしての図書館ではなく、本を読むことの楽しさや喜びが広がり、「自宅への宅配貸し出し」などの新しい公共サービスも展開できる、ハード・ソフトの充実した施設が望まれる。多くの市民の方々にこのような議論が広がることを期待したい。



【 防音扉で仕切られた乳幼児専用の読み聞かせコーナー 保護者に好評とのこと】